

〈特集〉シンポジウム

「とき」の支配と時間意識

特集にあたって

河原 温

歴史学は、人類の歩んできた多様な「過去」の世界を探索してきた。その中で、「過去」を規定する「とき」ないし「時間」は、世界各地においていかにとらえられてきたであろうか。「とき」は、異なる諸文明においていかに統制されてきたのであろうか。そしてまた、いかなる秩序をそれぞれの文明にもたらしてきたのであろうか。こうした問いを背景に、近年進展しつつある「とき」の歴史研究の動向を見据えながら、二〇〇九年四月のメトロポリタン史学会のシンポジウムでは、宗教や政治の支配者、民衆にとっての「とき」の意識、暦法や時法といった「とき」を司る原理の諸文明における多様性などを比較考察する場を設定し、歴史的「とき」をめぐる再考を試みた。このシンポジウムが本特集のベースとなっている。

シンポジウム当日には、中国古代史、イスラム史、日本近代史、史学史を専門とする四名の方々から各領域における「とき」の意識とその統御のあり方を論じていただくとともに、各報告をめぐる多彩な質疑応答を通じて、「とき」をめぐる歴史学の現状と可能性がさぐられた。特定の領域・時代からの報告が中心となったが、シンポジウムの論議を受けて執筆された本特集の論文には、今後の研究への豊かな示唆が読み取られるであろう。

なお、シンポジウムでの四名の報告者のうち、佐藤正幸氏の報告（なぜキリスト紀年は世界共通紀年になり得たの

か」は、すでにその内容が氏の単著『世界史における時間』（山川出版社、世界史リブレット二二八、二〇〇九年八月）として刊行されており、今回はそのエッセンスをご報告されたため、本特集には、報告要旨を掲載させていただいた。また、成田龍一氏の報告（「明治国家の時間／国民国家の時間／大日本帝国の時間——近代日本の時間意識」）については、事情により次号に論文として掲載される予定である。